

野球文化學會 第 6 回研究大会

野球文化伝播の 150 年
——明治から令和、そして新たな時代へ

野球文化學會第6回研究大会 プログラム

第1部 一般研究発表（12時から14時55分）

座長：鈴木裕輔（名城大学）・中村哲也（高知大学）

- | | |
|--|-------------|
| (1) 広尾晃／独立リーグ経営の現在地と将来 | 12:05-12:25 |
| (2) 朝西知徳／高校野球指導における新しい打者評価法の提案と教育的実践 | 12:25-12:45 |
| (3) 石村広明／ベースボール授業履修者の投能力について | 12:45-13:05 |
| (4) 金森潤熙／野球指導革命 | 13:05-13:25 |
| 休憩 | 13:25-13:35 |
| (5) 松原弘明／「2004年の球界再編」はどのように語られたのか？ —論文・雑誌のレビューから— | 13:35-13:55 |
| (6) 塩田芳久／ライオンズのライオンを追い—福岡野球(株)のファンサービスをめぐる一考察 | 13:55-14:15 |
| (7) 田所明憲・中村哲也／NPBと独立リーグにおけるセカンドキャリアの現状と課題～四国アイランドリーグplusとBCリーグ調査結果を踏まえて～ | 14:15-14:35 |
| (8) 伊藤正浩／野球地域史研究が拓く、野球史の新しい地平について | 14:35-14:55 |
| ・ 発表時間:15分、質疑応答時間:5分 | |

休憩（15分）

学会長あいさつ

鈴木裕輔会長

学会賞授与

第2部 シンポジウム（15時20分から17時30分）

座長：筆谷正敏（理事）

- | | |
|---|-------------|
| (1) 基調講演
池井優／野球伝来150年——ウィルソンから大谷翔平まで | 15:20-16:00 |
| (2) 報告(1)
永田陽一／日系人野球と野球150年 | 16:00-16:30 |
| (3) 報告(2)
井上裕太／野球150年と文化 | 16:30-17:00 |
| (4) 質疑応答 | 17:00-17:30 |

以上、敬称略

発 表 要 旨

第 1 部 一般研究発表

1～8 ページ

第 2 部 シンポジウム

9 ページ

独立リーグ経営の現在地と将来

広尾晃
(フリーライター)

【要旨】

■独立リーグのビジネスモデル

- ・ 現在、独立リーグは7リーグ33球団。その規模は観客動員、経営規模ともにNPB球団の100分の1と極めて小さい。損益分岐点を極限まで下げて存続している球団が多い。
- ・ また収益の内訳を見ても、NPB球団やJリーグクラブとは異なる部分が多い。そうした独立リーグ独自のビジネスモデルを、他のスポーツビジネスと比較しながら紹介する。

■独立リーグ球団経営の問題点

- ・ アメリカの独立リーグなどと比べると日本の独立リーグは規模も小さく、経営も厳しい。なぜ、日本の独立リーグの経営は厳しいのか、日本の国民性、NPBとの関係性、行政との関係性などの観点から、紹介する。

■独立リーグの将来性

- ・ NPB球団経営者や有識者に聞いた「独立リーグの将来性」について紹介し、その上で発表者の提言を述べる。

【キーワード】

独立リーグ、ビジネスモデル。野球のダイバーシティ

高校野球指導における新しい打者評価法の提案と教育的実践

朝西知徳
(羽衣国際大学)

【要旨】

高校野球は教育の一環である。教育活動においては、教育の過程および成果を数量的に捉えることが重要となる。従来の打者評価法（打率・出塁率）は、野球技術のみを計る指標であり、教育的な側面から選手を評価するまでには至らなかった。

従来の打者評価法

指 標	評価する内容	算 出 式
打 率	安打を放つ能力	安打÷打数
出塁率	安打を放つ＋ 四死球を選ぶ能力	(安打＋四球＋死球) ÷ (打数＋四球＋死球＋犠飛)

そこで、教育を重視すべき高校野球の指導者が用いるために、選手のチーム貢献度を教育的な側面から計ることのできる新しい打者評価法（純出塁率・仕事率）を開発した。

新しい打者評価法

指 標	評価する内容	算 出 式
純出塁率	実質的な出塁能力	(安打＋四球＋死球＋敵失＋野選＋被妨害) ÷ 打席
仕事率	仕事をする能力	(安打＋四球＋死球＋犠打＋犠飛＋進塁打＋敵失＋野選＋被妨害) ÷ 打席

従来の打者評価法である出塁率は、安打と四死球（四球＋死球）のみによる出塁能力を示す指標である。しかし、全力疾走により、敵失（敵の失策）や野選（フィルダースチョイス）など、相手のミスを誘うことも出塁能力であると考えた。それらの実質的な出塁まで評価しようと「純出塁率」を提案する。

従来の打者評価法である打率は、安打のみによる打撃能力を示す指標である。したがって、犠牲的精神が必要される犠打や進塁打が反映されないなど、一つの尺度・側面からしか計れないという弱点があった。その弱点を埋めようと「仕事率」を提案する。

鳥取・米子商業高等学校（現・米子松蔭高等学校）野球部の監督として「夏の甲子園出場」を果たせたことや、大阪・羽衣学園高等学校野球部の監督として「夏の初勝利」を収めたことは、新しい打者評価法の導入と無関係ではないと考えている。今後は、提案した新しい打者評価法が、どのような社会心理的側面と関係性があるのかを確かめていきたい。

【キーワード】

高校野球、教育、純出塁率、仕事率

ベースボール授業履修者の投能力について

石村広明
(桃山学院大学)

【要旨】

文部科学省が昭和39年から行っている「体力・運動能力調査」によると、昭和60年ごろを境に子どもの走る力、投げる力、握力などは、全年代において長期的に低下の一途をたどっている。本発表では、大学の共通教育科目であるベースボール授業を履修している学生の投球データの分析を通して、①投球データと遠投力の関係性、②野球競技経験の有無による違いを明らかにすることを目的とする。対象とした学生は2022年度にA大学で開講された「健康・スポーツ科学演習（ベースボール型）」を履修した15名（男性14名、女性1名）である。野球競技の経験の有無については、経験者が10名、未経験者が5名であった。投球データの取得の方法はSSK社の「テクニカルピッチ（軟式M号球）」を用いた。対象者には18.44mの距離から全力投球を行わせ、3球分の投球データを集めた。用いる投球データは「球速・回転数・ホップ成分・スライド成分・シュート成分・ドロップ成分・腕の振りの強さ」である。遠投は軟式M号球を用いて実施し、3回の試技のうち最も良かった記録を採用した。

表1. 各項目の平均値および標準偏差

項目	球速	回転数	回転軸	ホップ	スライド	シュート	ドロップ	腕の振りの強さ	遠投
平均	95.6	1256.1	-5.2	57.1	16.8	12.1	0.5	22.2	64.6
標準偏差	16.3	235.0	29.3	18.8	23.1	16.3	2.0	2.3	14.8

結果①投球データと遠投力の関係性をピアソンの積率相関係数を用いて求めたところ以下のような相関がみられた。球速・・・0.83、回転数・・・0.59、スライド・・・-0.27、ドロップ・・・-0.37、腕の振りの強さ・・・0.49

結果②野球競技経験の有無による違いを対応のないt検定によって求めたところ、球速、腕の振りの強さ、スライド成分、そして、遠投の距離に有意差がみられた（ $P<0.05$ ）。

【キーワード】

ベースボールスポーツ、大学体育、投能力、IoT

野球指導革命

金森潤熙

(運動理論物理学者)

【要旨】

背景：日本とアメリカの野球経験、野球指導を経験した結果、子供の時から思っていた日本野球界の「暴力、暴行、パワハラ指導」に大きな疑問をさらに抱いた。

「暴力は、コーチングでは無いと」

目的：野球指導の歴史の研究を深める事により「何故、指導暴力」が繰り返し行われてきたのかを世間に明らかにし、日本の野球関係者と国民に知ってもらう事です。また、日本野球指導を世界の野球界の野球指導の議論に持ち上げ、日本野球指導の歴史、文化、問題点から大きな議論を世界的に作り出したいと思う。

方法：野球文化學會の研究発表。多くの野球文化人、野球文化學會による雑誌掲載、書庫化、啓蒙活動、野球界の未来への提案、各野球団体へ「指導者ライセンス制度」導入への働きかけ、雑誌、新聞、TVなどのマスメディア媒体への働きかけ。

結果：野球指導者の暴行事件、事故。野球部員の暴行事件、事故。各野球団体の把握している事件、事故などの資料の検証を続ける。指導者事件、暴行傷害、モラハラ、セクハラ、暴力行為など指導者の暴力を選手が行うようになる。過去の重大な生徒事件、大学生野球部員によるホームレス集団暴行殺人事件、イジメによる溺死など。

野球界から「暴力の根絶」、指導の「質の向上」、選手生活の「質の向上」

結語：野球がアメリカから伝えられ、150年。日米合作の日本国憲法、野球界の暴力を容認、黙認する野球界の治外法権を無くし、国の最高法規である日本国憲法の法の下に日本野球界を治める。世界と日本の約束、アメリカと日本の約束が日本国憲法。日本国憲法の法の下に無い、日本スポーツ、野球界の治外法権を根絶させて「野球指導革命」を野球文化人の力で成し遂げたいと願い研究発表にいたしました。これを成すためには、野球文化學會の皆様と多くの野球文化人の皆様のご協力とお力が必要です。野球指導革命を成し遂げるのは、この研究を知って頂いた皆様です。野球文化人の小さな歯車が集まり大きな野球界に指導革命を起こし野球界を変革しましょう。私は、この研究発表により野球文化人の皆様のお力が「野球指導革命」の名の下に集まる事を願っております。

【キーワード】

野球指導、野球指導革命

「2004年の球界再編」はどのように語られたのか？ —論文・雑誌のレビューから—

松原弘明
(電気通信大学)

【要旨】

〔背景〕2004年、プロ野球は「球界再編」に揺れた。2004年6月、大阪近鉄バファローズ（近鉄）とオリックス・ブルーウェーブ（BW）の両球団の合併報道に端を発し、赤字経営に苦しむプロ野球界の構造を是正するための「1リーグ制への移行（パ・リーグの消滅）」、「球団合併」による球団数削減が経営陣により企画された。「球界再編」はその後、ライブドア社長堀江貴文氏による近鉄球団買収構想とその頓挫を経て、ファン・選手らによる社会運動に発展し、①近鉄・BW球団の合併反対、②1リーグ制移行阻止および2005年シーズンからの新規球団参入、の2点が争点となった。この騒動の約3ヶ月間の間に全国122万人以上の反対署名が集まった。2004年9月からはプロ野球選手会と経営陣との間で上記2点に関して協議が行われたが決裂し、9月18、19日には日本プロ野球史上初の選手会によるストライキが実行された。ストライキの後、2005年からの新規球団の参入が認められ、東北楽天ゴールデンイーグルスと、近鉄・BWの合併球団オリックス・バファローズの誕生を経て、プロ野球の歴史は再編問題を風化させたまま、現在まで続いている。

〔目的・方法〕本報告の目的は、「2004年の球界再編」についての言説を内容分析し、本問題について「語られたこと/語られなかったこと」を明らかにすることである。分析対象には、CiNii(国立情報学研究所学術論文データベース)およびJ-STAGE、google scholarにて「球界再編」「選手会ストライキ」「オリックス」「近鉄」などの組み合わせで検索を行いヒットした論文・雑誌記事を用いた。本報告では野球雑誌・新聞等は分析対象に含めなかった。

〔結果〕分析の結果、「合併反対」「1リーグ制移行阻止」といった、ファン・選手らの運動の対象となった野球界の争点はほとんど語られず、「選手会ストライキ」を労使紛争として語るものが過半数を占めた。学術論文では、球界再編についてプロ野球の産業構造や、コミッショナーの役割などの制度の欠陥・不備を指摘したもの、近鉄・BW、そして合併後のオリックス・バファローズのファンに対し合併の影響を調査したものがあつた。また、問題に関連した人物としては、当時プロ野球選手会長だった古田敦也選手、プロ野球コミッショナーの根来泰周氏、堀江貴文氏がクローズアップされていた。総じて、球団が消滅する近鉄・BWのファンの姿は、選手会の労使紛争やスポットライトを浴びた人物の陰に後景化されていた。

【キーワード】

文献レビュー、選手会ストライキ、社会運動、古田敦也

[第1部 研究発表]

ライオンズのライオンを追え—福岡野球（株）のファンサービスをめぐる一考察

塩田芳久

（西日本新聞社）

【要旨】

プロ野球の球団には、ニックネームにちなんだマスコットいてファンに親しまれている。ジャイアンツのジャビット、スワローズのつば九郎、バファローズのバファローブル。しかし埼玉西武ライオンズの前身球団、太平洋クラブライオンズが1974年にマスコットとして「本物」のライオンを本拠地の平和台球場で飼っていたことは忘れ去られている。親会社の福岡野球（株）が西鉄から球団を買収して2年目、「黒い霧事件」で離れていったファンを取り戻すための球団によるサービスの一貫だった。仕掛け人は球団の営業開発促進室長で、後に東北楽天イーグルスのGMを務めたマーティー・キーナート氏。現在も類例のない球史初の発想の背景には、米国人独特のファンサービスの思想と球団経営の厳しさがあった。一方、当のライオンはシーズンイン直前の3月31日、福岡入りした。生後4カ月の雌の赤ちゃんだった。当初は球団の思惑通りに子どもたちの心をわしづかみにしたが、ライオンの成長は早く、3カ月もすると大人のライオン並の体格に。もはや猛獣となり、ホームゲームの開始前にグラウンドに登場して相手チームを威嚇していたが球場で飼い続けるのは困難になってきた。シーズンオフと共に、よその土地へ“放出”されてしまう。関係者に聞いても行方は分からなかったが、発表者は約50年後の今年、調査して引取先などを確認した。以上のようなエピソードを基に、球団によるファンサービスの歴史を考え、新たな研究課題の糸口を提示したい。

【キーワード】

太平洋クラブライオンズ、福岡野球、平和台球場、球団マスコット、マーティー・キーナート

[第1部 研究発表]

NPBと独立リーグにおけるセカンドキャリアの現状と課題 ～四国アイランドリーグ plus と BC リーグ調査結果を踏まえて～

田所明憲・中村哲也
(高知大学)

【要旨】

日本人の平均寿命が80歳を超えるのに対して、野球界における選手寿命は20代と非常に短い。また、2021年にNPBを退団した選手の進路調査結果では、NPB関係以外の野球に関する就職先を選択した全体の19.58%のうち、社会人野球、海外チーム、独立リーグの合計だけで17.49%を占める結果だった。これらのリーグは、給与面やプロとしての環境面でもNPBに圧倒的に劣っている。このことから、NPBを目指す選手には野球に集中する環境と同じように、野球ではない次のキャリアに対しての環境も整えていく必要がある。

これらの背景を踏まえて、本報告は日本の独立リーグである四国アイランドリーグ plus に着目し、選手のセカンドキャリア意識や、球団の取り組みを明らかにしていきたい。研究課題としては、NPBと独立リーグ所属選手におけるセカンドキャリア志向の相違点に加え、キャリア面で格差が生じている原因について模索する。そして、NPBと比較して給与や環境に大きな差のある独立リーグでは、セカンドキャリアの観点ではどのような差が生まれるのか明らかにする。

上記の研究課題を明らかにするために、以下の調査に取り組んだ。2022年8月31日に丸亀市で開催された四国アイランドリーグ plus の企業説明会に参加し、所属選手122名を対象にセカンドキャリア志向に関するアンケートを行った。その結果を既存データのあるルートインBC、NPBのアンケート結果と比較することで相違点を発見する。そして、既存研究を参考に相違点の原因を模索したうえで、元独立リーガーであり、教員や一般企業の経験もある四国アイランドリーグ plus の事務局長を務める野副星児さんにインタビュー調査を行う。元選手としての考えやキャリアを支える立場という多様な考え方を持つ方にインタビューすると共に、現在のセカンドキャリア支援とこれからの展望も模索していく。

現在、NPBではフェニックスリーグ参加選手に対して行うセカンドキャリアに関するアンケートや、学生野球回復資格制度の講習会の実施を行っている。また、四国アイランドリーグ plus では、球団単位での活動は行っておらず、リーグ全体で企業説明会や今年度からはOB座談会も開催している。

四国アイランドリーグ plus 所属選手のセカンドキャリア志向に関する調査では、NPBと比較して、四国ILの方が引退後の生活に不安を持っていないことが明らかになった。また、同じ独立リーグであるルートインBCとの比較では、引退後の就職場所や求める条件において相違点や類似点があった。このアンケート結果の比較から、これからのセカンドキャリアの改善点や原因の模索を本報告で行っていく。

【キーワード】

セカンドキャリア、NPB、独立リーグ、四国アイランドリーグ plus、BC リーグ

[第1部 研究発表]

野球地域史研究が拓く、野球史の新しい地平について

伊藤正浩

(近代仙台研究会・野球文化學會)

【要旨】

野球地域史が日本野球史研究を発展させていくものであることを示す。

【きっかけ】

2019（平成31）年4月から2022（令和4）年8月まで、朝日新聞宮城版に、「みやぎ野球史再発掘」（2019～2020年）、「続・みやぎ野球史再発掘」（2021年～2022年）と題するコラム連載を行った。伝来以来の仙台・宮城の野球史を深掘りし、様々なエピソードを紹介した。興味のままに調べた事柄を書き述べたものであったが、思いがけず、中村哲也先生（高知大学）から「野球史の地域史の嚆矢」とのお褒めをいただいた。これが気づきとなり、野球地域史の重要性認識するに至った。

【詳細】

野球伝来150年。野球史のメインストリームと言えるプロ野球、東京六大学野球、甲子園の高校野球といった球史については、長年の研究が行き届いている。しかし、野球は、近代日本の「国技」ともいえるべき存在として、日本の津々浦々にまで浸透し、長らくテレビ・ラジオ・新聞・日常の話題の中心の座にあっただけに、その底辺は広く、各地域ごとの歴史が存在するが、それらの研究は十分に行われてはおらず、それらは体系的にまとめられていない。この野球の地域史研究の発展は、日本野球史研究をより豊かなものにしていけるものである。

しかし、野球地域史は、史料素材の所在地に起因する限界から、地元在住者でないと研究が困難である。また、同様の理由のために、体系的な研究のためには、横断的な協力体制が必要とされる。これは、各地域の研究者ひとりひとりが主役となれる研究であることを意味していると同時に、各地の研究者が加入している野球文化學會は、横断的連帯の中心的な役割を担う存在足り得ることを示すものである。

【キーワード】

野球史、地域史、郷土史

基調講演

野球伝来 150 年 ——ウィルソンから大谷翔平まで

池井優

(慶應義塾大学名誉教授・野球文化學會顧問)

【略歴】

1935 年東京都生まれ。慶應義塾大学名誉教授。法学博士。専門の日本外交史のほか日米の野球の歴史にも詳しい。

主な著書に『三訂日本外交史概説』（慶應義塾大学出版会）、『語られなかった戦後日本外交』（慶應義塾大学出版会）、『白球太平洋を渡る一日米野球交流史』（中公新書）、『オリンピックの政治学』（丸善ライブラリー）、『藤山一郎とその時代』（新潮社）『あの頃日本人は輝いていた』などがある。

報告(1)

日系人野球と野球 150 年

永田陽一

(ノンフィクション作家・野球文化學會会員)

【略歴】

1950 年福岡生まれ。大阪大学法学部卒業。ペンシルベニア大学 MA（国際関係論）。SABR（アメリカ野球学会）会員。

主著に『ベースボールの社会史 ジミー堀尾と日米野球』『東京ジャイアンツ北米大陸遠征記』『ベーブ・ルースは、なぜ甲子園でホームランを打てなかったのか』（以上、東方出版）、『日系人戦時収容所のベースボール ハーブ栗間の輝いた日々』（刀水書房）がある。

報告(2)

野球 150 年と文化

井上裕太

(弘前学院大学格子)

【略歴】

1988 年生まれ、埼玉県川口市出身。國學院大學文学部史学科卒、同大学院文学研究科博士課程前期修了、同博士課程後期修了、博士（歴史学）。神奈川県埋蔵文化財センター非常勤職員、秩父宮記念スポーツ博物館学芸員、野球殿堂博物館学芸員を経て、2022 年 5 月より現職。主な専門は、博物館学、音楽史、スポーツ史、野球史等。特に、音楽、スポーツ、マンガ等の大衆文化の展示と活用に関して研究。著書に『日本音楽博物館論』（同成社、2021 年）。東海林太郎音楽館学術顧問。

野球文化學會第 6 回研究大会プログラム・要旨集

2022 年 12 月 9 日印刷

2022 年 12 月 11 日発行

発行人：鈴木裕輔

発行所：野球文化學會

所在地：133-0056 東京都江戸川区南小岩 6-10-5 雲プロダクション内
電話・ファクシミリ：03-6458-9959

URL： <https://baseballogy.jp/>

Twitter：@baseballbunka